恋とエクシリア

炎鳳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋とエクシリア

【Ｎコード】
Ｎ７０２７Ｗ

【作者名】
炎鳳

【あらすじ】
恋「……ここ、どこ？」

あの恋姫無双の恋がエクシリアの世界、リーゼ・マクシリアに異世界転移してしまった！
恋はそこでどんな冒険や出逢いをするのか。

それは恋の活躍次第。
さぁ！今開く、恋とその仲間たちが織りなす、新たな物語は始まる！

恋「……お腹、減った。」

始まり（前書き）

初めまして。炎鳳です。初めての小説で短いですが宜しくお願いします。

ではどうぞ。

始まり

とある山間部にて、一人の女の子がいた。１６～７歳ぐらいの美少女が歩いていた。
少し肌が褐色だ。服装は、白と黒を基調とした服で、白い長い袖を通し、白いミニスカート。
黒いニーズソックス、靴を履き、ヘソ出しルックで背中に黒い刺青がある女の子。
両目と髪が赤く、顔は無表情で頭に触角みたいなアホ毛が少女が歩くたびにひょこひょこ動いている。
たいへん可愛らしく美少女だが、彼女の持っている得物が対照的だった

長い柄の先に太陽に反射し、禍々しく光る刃。黒を基調とした武器で、赤黒い玉がはめ込められて一段と禍々しさがでている

方天画戟

を肩にかけていた。

彼女の名前は呂布。字を奉先という。

呂布は無表情のまま、山間部を歩いていた。

「ワンッ！」

呂布は足元を見ると、首に赤いスカーフを巻いた一匹の子犬が見上げていた。

「……セキト。どうしたの？」

セキトとは呂布の飼っている子犬だ。セキトは主人を見て鳴いた後、前を向き唸り始めた。

「……セキト、どうしたn……っ！」

呂布は突然謎の禍々しい気配を読み取り、方天画戟を構えた。呂布は精神を研ぎ澄まし禍々しい気配を探った。

「……っ！そこ！」

呂布は禍々しい気配を的確に見つけ方天画戟を振り落とした。その時だった。

「…えっ？！」

突然、呂布とセキトの足元に穴が開き、二人はその穴の中に吸い込

まれるように落ちていった。
呂布はすぐに左手でセキトを捕まえ抱きしめた。
「恋の家族は……かなら、ず……まも、…る。……」
呂布、恋はセキトを抱きしめながら気を失っていった。

？？？side

「どうやらうまくいきましたね。」
全身を真っ青な装束に身を包み、フードを被った人が言った。声の感じから、中性に近い若い男性だとわかる。
「さて、これで役者は揃った。精々、死なないようにな。……呂布よ。……フッ、フハハハハハハハハハハハッ！」男性は気味悪く笑うとまるで元々、そこに居なかったように、スゥっと消えていった。
新たな物語は

今、

始まろうとしていた。

始まり（後書き）

これからもがんばりますので、応援宜しくお願いします！

恋、目覚める（前書き）

感想にて指摘がありましたので変更いたしました。
最新話、どぞ！

恋、目覚める

？「……ン！……ッン……ワッン……ワッンワンワンワンッ！」

犬、セキトの鳴き声が聞こえる。

「……う、う～ん。……！セキト！」

恋は自分の腕に抱いているセキトを見てうれしさのあまり抱きしめた。

「セキト！…無事で良かった…！」

「ワンッ！」

恋はセキトを両手で抱きしめながら上半身を起こし、辺りを見回した。

すぐそばには恋愛用の得物、方天画戟が落ちていた。周りは木々が生え、道が延びていた。どうやら恋は、道の真ん中に倒れていたようだ。

上を見てみると、暗い闇が広がっていた。今は夜らしい。

「……ここ、どこ？」

恋はセキトを下ろし、代わりにそばに落ちていた方天画戟を拾い上げだ。

「…ん？」

恋は自分の違和感に気づいた。

両脇に紐があり、背中になにかを背負っており。右の腰には麻袋があった。
恋はまず、背中にあった' なにか' を下ろし目の前に持ってきた。
その' なにか' は背中を守る背甲だった。背甲は、色は黒で、とても軽く丈夫のようだ。
その背甲は右上から左下にかけて、筒が縦に裂けて一寸程開いている物のが付いていた。

「……？」

恋はこの筒みたいな物を見て悩んでいたが、ふと、自分の持っていた方天画戟の柄を筒みたいな物に近づけた。

ガシャン

「！！！」
「ワン！」
突然、筒みたいな物が閉じ、方天画戟が固定された。
いきなりだったので恋とセキトは驚いた。恋は背甲を落とし、セキトは脱兎の如く恋の後ろに隠れた。
恋は恐る恐る背甲を手に取り、背甲から方天画戟を取ろうと、柄に手をかけ、手前に持ってきたら。

カチャ

「……はずれた。」
方天画戟がはずれた。恋は何回か試してみた。
どうやら筒みたいな物は恋の方天画戟を仕舞う位置に動くらしく、
方天画戟を横にしてみたら筒みたいな物が方天画戟に併せて動いた。
（この時もセキトはすぐに後ろに隠れた。）

「……♪」

恋は面白かったみたいだ。その証拠に二本のアホ毛がぴょこぴょこ動いていた。

次に恋は、腰にあった麻袋をとり、中身を取り出した。
まず始めに取り出したのは。

「……きれい。」

きれいな球だ。
恋は少しの間、見とれていた。

続いて取り出したのは、路銀を入れる袋だ。中身を見てみると。

「……あれ？」

そこに入っていたのは、恋のよく知る硬貨や紙幣ではなく金色の硬貨だった。

「……？」

恋は解らないので仕方なく先程の硬貨をしまい麻袋の中に入れ、他の物を出してみた。

水色の液体が入った瓶。赤色と橙色をしたぷにぷにした丸型の何か。
瓢箪もあった。
意外と沢山はいっていた。

恋は中身を一通りみた後、立ち上がり、麻袋を腰に下げ、方天画戟を背中にしまった。
（この時気付いたことがある。恋の動きを邪魔しないように方天画戟の柄を支えている筒が動くようだ。……少し怖いけど…便利だ。）
恋はこれからもどうするか悩んでいると。

ぐぅぅぅぅ〜

「……お腹、減った。」

お腹が減った。
そういえばあの時、山間部を歩いていたのは食べられる茸を探していたからだ。
どうしようと、セキトと悩んでいると。

グルルルゥ

獣、しかもかなり狂暴な獣。
狼がそこにいた。

「……？」

恋は違和感を感じた。

狼、にしては少し違う。よくは解らないが恋を狙っているのはわかる。その証拠に

グルルルルルルルゥ

「……囲まれた。」

恋とセキトを中心に数十匹の狼（？）に囲まれてしまった。

恋、目覚める（後書き）

結果。中途半端です。

これには訳がありますのでご理解してください。

恋の背甲については、私の考えた装備です。１０分もかかってません。（恋ならどう表現とリアクションをするのか悩みました。恋はあまり表情を出すことが少ないですからねぇ。）

次回は恋がモンスターと戦います！

お楽しみに待ってください！

お知らせ（前書き）

現状報告です。

お知らせ

皆様にご報告があります。
恋とエクシリアですが。最新話が只今難産で、やっと半分できたと、いうことです。何とか知恵を絞って書いております。
次の更新は早くても明日。遅くて今週の火曜日になると思います。
皆様にはご迷惑をお掛けしますが。どうかそこのところを、ご了承下さい。

最新話は、皆様のご期待に添えるように頑張ります。
それでは、次回。恋、戦う　を楽しみにしてください

次回、やっと出したかったオリキャラがでます！
お楽しみに！

恋、戦う（前書き）

みなさま大変長らくお待たせ致しました。

最新話、恋、戦う

どうぞ！

恋、戦う

恋は囲まれている。
数十匹の狼に。

「……」
恋は静かに、背中にしまった方天画戟を取り出し、構え、目を閉じ、精神を研ぎ澄ます。

「ガウッ！」

一匹の狼が飛びかかってきた。
恋は目を開け、その場を動かず、方天画戟を左から右に払う。

ズシャァァァァッ！

狼は鮮血を辺りに出しながら斬り飛ばされ、絶命した。
他の狼は一瞬怯んだが、時間差で十数匹の狼が前後左右に襲ってきた。

「……甘い…。」

恋はまず、前から来た狼に右上から袈裟斬り。

狼の鮮血が舞う。

そのまま真横に薙ぎ払い、右から襲いかかってきた狼三匹を切り捨てる。

恋は直ぐに方天画戟を、斬り上げる。
恋の後ろ（今は右だが）にいた狼が頭を縦に切られ宙に舞う。
そのまま上に掲げた方天画戟を後ろに振り落とす。
飛びかかってきた狼が断末魔の叫びを上げ、絶命。
恋はそのまま×をえがくように斬る。
襲ってきた狼、六匹を斬り伏せる。
恋は方天画戟を逆手に持ち、後ろに刺す。
不意打ちを狙おうとした狼の腹を貫く。
狼の腹を貫いた方天画戟を、恋自信を軸に、両手で振り回し、左前から来た狼にぶつける。
方天画戟に刺さっていた狼が抜け、ぶつかった狼諸共吹っ飛び、木にぶつかり絶命。
そのまま左上から袈裟斬り。
飛びかかってきた狼を真っ二つに斬り伏せた。
計十四匹を斬り伏せた。
この間、たったの三秒

ギャン！ドサドサドサッ

やられた狼達の断末魔と落ちてくる音が遅れて聞こえた。

「……まだ……殺る？」

恋は殺気を出し、狼達を威圧した。

グルルルル　ガウッ！ガウッ！ガウッ！

狼達は恋に吠えた後、尻尾をくるっと巻いて逃げた。

「……ふぅ」

恋は狼達が見えなくなると、構えを解き、血の付いた方天画戟を払い、背中の背甲に納めた。

「…セキト、どこ？」

いつの間にか恋の足元に居たはずのセキトがいなくなっていた。

「セキト！セキト！セキト！」

恋は慌ててセキトの名を呼んだ。すると、

「クゥ～～～～ン」

近くの草むらからセキトが出てきた。どうやらそこに隠れていたらしい。

「セキト、心配、かけちゃダメ。」

「……ワン」

恋が叱ると、セキトは申し訳ない感じに鳴いた。
恋はセキトは反省したと思い、そのままセキトを抱きしめた。

「次から、心配かけちゃダメだよ。」

「ワン！」

恋が優しく言うとセキトは元気に吠え、恋の顔をペロペロ舐めだした。

「セキト、くすぐったい」

なんとも微笑ましい光景だ。

恋とセキトはそうしてじゃれあっていた。

だが

世界は時に

非情で

ある

ドシンッ！

「…！！」

恋は急に訪れた威圧感と殺気を感じた。
セキトはなにかを感じた恋を心配そうに見ていた。
すると、恋がセキトを見、少し目を閉じ、なにかを考えた。そして

「セキト、逃げて」

恋はセキトを逃がすことにした。
当然、セキトは驚き首を振った。しかし。

「お願いだから、逃げて。……もしかしたら、セキトを守れないかもしれないから。」

恋の目は本気だった。
セキトは目を伏せ、悩んでいた。

「お願いセキト、逃げて」

「クゥ〜〜〜〜ン」

「お願い。」

「クゥ、クゥ〜〜〜ン」

恋はセキトの目を凝視した。

セキトは伏せた目を開け。

「ワ、ワン！」

恋の腕から降り、走り去っていった。

何度も振り向き、恋を見ながら。

「……ふぅ」

恋は、セキトが見えなくなるのを確認すると。

「……来た。」

ドスン！ドスン！ドスン！と大きな足音。

ギシギシと、草が潰され、木がなぎ倒される。

そいつは、現れた。

「でかい……亀？！」

そこにいたのは、巨大な亀。色は黒く、目は鋭く、四本の足は巨木の如しの太さ。甲羅は肌色の棘が無数に生えている。高さは恋の身長の倍だ。

その巨大亀は恋を確認すると吼えだした。

「ゥオオオオオッッッー！」

「くっ！」

恋はあまりの大音量に無表情の顔をしかめる。

巨大亀は後ろ足を踏み鳴らし、突進してきた。

「……甘い」

恋は軽々と避けると、巨大亀の甲羅に方天画戟を振り落とした

が。

ガキン！

振り落とした恋の方天画戟が弾かれてしまった。巨大亀は前足を踏ん張り、動きを止め、恋を向きまた突進してきた。

「……っ！」

恋は突進を回避し今度は右前足へ横薙ぎに方天画戟を一閃。

「ウオオオオオッン！」

巨大亀はいきなりの痛みに驚き、恋の方に倒れてきた。
恋は素早く後退し、無防備となった巨大亀の腹に飛び乗り、方天画戟をその腹に突き刺した。

「ゴアアアアアアアァッ！」

巨大亀は腹にきた激痛に叫び声をあげ、両足をジタバタさせて恋をどかそうとした。
しかし、恋は巨大亀の腹から方天画戟を抜き、腹から飛び降り巨大亀の顔へ回り込み、方天画戟を上から下へ振り落とした。

ガバキンッ！

振り落とした方天画戟は巨大亀の顎に当たり、岩が割れる音が響いた。
巨大亀の顎が割れた音だった。

「ゴヴアアアアアアァッ！」

巨大亀は体を大きく左右に揺らし、元の体勢に戻り、怒り狂ったように吠えた。
恋は巨大亀のすぐそばにいたために、耳をふさぎ、しゃがみ込んでしまった。
それがいけなかった。

巨大亀は首を引っ込め力を溜め、恋に強力な頭突きを喰らわした。

「がはっ！」
恋はすぐに方天画戟で防いだが、そのまま頭突きを喰らい吹っ飛び弧を描き、木に背中を打ちつけた。

背甲があったのだが気休めにしかならず、強い衝撃が体を貫いた。
その衝撃で恋は方天画戟を離してしまった。

「（……まずいっ！）」

巨大亀は恋のすぐ前にいて、後ろ足で立ち、前足を上げ、恋を踏みつぶそうとしていた。
巨大亀の攻撃を避けるにも、もう間に合わない

「（……セキト……ごめん）」

恋は死を覚悟し、目をつぶった。

そのときだった！

「諦めたら、そこでジ・エンド、…終わりさ。」

「えっ？」

不意に声が聞こえた。

恋はすぐに目を開けると、誰かが恋の横から出てきて。

「龍牙滅殺！」

光り輝く剣（？）を今、足を振り落とそうとしていた巨大亀の腹に、左下から右上、右下から左上へ×を描くように斬った。（丁度恋が、腹を刺した傷に当たるように）

「グオオオオオォォォ！」

巨大亀はまさかの攻撃、しかも腹に攻撃を受け、後ろに倒れてしまい、又してもジタバタしていた。

恋は、あまりの展開に頭で状況を整理しようとしていた。

すると

「大丈夫か？キミ？」

助けてくれた人が剣（？）を鞘に納め話しかけてきた。恋は初めてその人をじっくり見た。

その人は男性。声からして青年だ。姿は、蒼い髪に目は普通だが右目が赤色で左目が蒼。顔は思春期真っ盛りの青年の顔。

服装は上は黄色と蒼、下は赤を基調とした格好だ。

腰には先ほど納めた剣（？）。背中は、よく見えないが大剣を背負っていた。

「……誰？」

恋は男性に聞いた。

「ん？俺？俺の名はシャルガ、シャルガ・エルヴィンだ。」

「シャル……ガ？」

「そう、シャルガだ。……キミの名前は？」

今度は男性、シャルガが訪ねてきた。

「……呂布奉先」

恋が答えると

「呂布ちゃん……でいいかな？」

「……うn「ワンワン！」……えっ…セキト？」

恋がシャルガにうんと言おうとしたら犬の鳴き声が聞こえた。それはセキトの鳴き声だった。

「セキト！」

「ワン！」

恋がセキトの名前を言うとセキトが走ってきて恋に飛びついた。

「セキト！無事でよかった。」

「クゥ～～～～～ン」

恋がセキトを抱きしめ、無事だったことを喜んだ。するとシャルガが

「そのわんちゃんに感謝しろよ～。その子が俺をここまで導いてく

れたんだぜ。その子が俺に会ってなかったら、呂布ちゃんは今頃、こいつにぺちゃんこになっていたかも知れねぇぜ。」

「セキト？本当？」

恋がセキトに聞くとワン！と元気に吠えた。

「……セキト…ありかとう……」

恋は嬉しく少し泣いてしまった。
セキトはその恋を見て、涙を舐めようとしていた。
恋は「セキト、くすぐったい」とじゃれあっていた。
シャルガはその様子を温かく見守っていた。

「さて。さっさとこのアングリータスを倒すとするか。」

先ほどまでジタバタしていた巨大亀、アングリータスが起きあがった。

「呂布ちゃんはそこでじっとしていな。」

シャルガが言うと

「恋も、戦う。」

と言ってきた。しかし

「ダメだ。右足を捻挫している娘(こ)を戦闘に出せるかよ。しかも武器を持っていないんじゃ。ね。」

「……え？……っ！」

恋は不思議がっていたが急に右足から鋭い痛みがきた。どうやら本当に捻挫しているようだ。しかも方天画戟は恋より離れたところに落ちていた。

「ここは俺に任せな。一瞬で終わらせるからよ。」

「……（コクッ）」

恋は納得しその場に座った。

「さて。……すぐに、終わらせる。」

そのとき、シャルガの雰囲気が変わった。
フラッとしている感じから、キリッとしている感じに変わった。

「すぐに終わらせるには、やはり大剣だな。」

シャルガは背中にある大剣を取り出した。その大剣は真ん中に線が通るように裂けていた。

シャルガは腰を落とし、大剣を両手で持ち水平に構えた。

「…一瞬だ。……明鏡…」

そういうとシャルガの姿がぶれ、アングリータスの後ろにいた。

「止水！」

シャルガは大剣を振り上げた格好だった。

「グオオゥ……オ…ゥ」

ドスン！

するとアングリータスは呻き声をあげ倒れた。

「まぁ、こんなところかな。」

恋は目の前に起きたことに理解できず。

ただ呆然としているだけであった。

恋、戦う（後書き）

皆様遅くなってしまい申し訳ありません！
言い訳はしません。
次からは早く投稿出来るように致します。

えー、オリキャラのシャルガ。どうでしたか？
一応顔は、ＴＯＶのユーリ似です。

では次回をお楽しみに！

恋、シャルガと会合（前書き）

二週間以上開けてしまいました。
ごめんなさい！
理由は後書きにて。

それでは最新話です。

どうぞ。

恋、シャルガと会合

恋は呆然としていた。

あの巨大亀を、一瞬で倒した男、シャルガ。
巨大亀を前にして雰囲気が変わり、このシャルガの言うとおり一瞬で終わらせた。

何者か？

ただ、わかっていることはただ一つ

「（恋より、……強い！）」

と、言うことだ。

当のシャルガは大剣を納め、こちらに向かってきた。先程の気配は感じられない。

「呂布ちゃん、終わったぜ。」

シャルガが悠々と戻ってきた。

「どうだい俺の剣技。すげーだろ。」

シャルガの剣技は見たことがない。大剣の構えは普通、中段に構える。
シャルガは大剣を横に持ち、腰を落としていた。
「……見たことがない、構え」

「ははっ。よく言われるよ。」

シャルガは恋の言ったことに、笑いながら答えた。

「初対面の奴らはそういうぜ。……あいつらはそんな事気にしていなかったな（ボソ）。」

シャルガは昔を懐かしむような顔をしていた。

「……どうしたの？」

恋は心配して声をかけた。シャルガは、はっとして。

「おっ！わりぃわりぃ。ちと昔を思い出してな。……それよりも。」

シャルガは恋の前にしゃがんで右足の付け根をさわった。

「ここ…痛くないか？」

「あっ……ッ！」

シャルガがさわったところは。恋が先程の巨大亀（アングリータスというらしい）の攻撃を受け捻挫しているところだ。

恋は言われて少し足を動かしてしまい、痛みが襲ってきた。

「大丈夫か？…すぐに治すから足、動かすなよ。」

シャルガはそう言うと、捻挫している患部に両手を掲げた。すると

「……えっ！？」

シャルガの掲げた両手に光が集まり、患部をその光が包み込んだ。

「あまり動くなよ。」

暫くして

「……よしっ！これでＯＫだ。」

シャルガが手を離すと、恋の患部を包んでいた光が消えた。

「痛く……ないか？」

恋は足首を動かしてみた。

「……痛く、ない」

「そりゃあ良かった。でもあまり動かすなよ。」

「……？」

「俺のやったのは応急措置みたいなやつだからさ。また動かして痛みがぶり返したら、いざという時にうまく反応出来ないぜ。」

「……（コクッ）」

恋は頷いた。

「さて……呂布ちゃん、聞きたいことがあるんだけどさ。なんで

ここにいるんだ？」

「……わからない」

「はうぇい？」

予想外の返答が来たのでシャルガはへ？と、はい？が混ざった変な声を出した。

・・・・・・・・・・・

「まさか、その…えーっと「…セキト？」そう、そのセキトと一緒に山を歩いていたら、変な気配を感じて攻撃をしたら穴があいて、ここにいた。っていうオチか？」

えっ？！

「……なんで、わかったの？！」

へっ？

「えっ、マジ？」

・・・・・・・・・・・・・・・

「今」

「オイオイ…ぜってー有り得ないことを言ったんだが。…ハァ。」

シャルガは右手で後ろ髪を掻きながらため息を吐いた。

「……今の、勘？」

恋は不思議そうに聞いてきた。

「あぁ勘だ。俺って昔っから勘はよく当たる方だって言われてんだよ。そのせいで何度怪しまれたことか…。」

シャルガはショボーンとした感じで答えた。

恋は始め、シャルガが見事に当てたので疑っていたが、先程の様子から嘘をついてない思った。

するとシャルガは恋にあることを訪ねた。

「まっ、一応ここにいた理由は俺の勘で解ったけど……呂布ちゃんはこれからどうすんの？」

「……どうしよう。」

シャルガの言われたように、恋は右も左もわからないところに放りだされ、どうすればいいのかわからなくなっていた。

恋がどうしようと悩んでいると。

「幾宛がないんなら」

俺と、一緒に来るか？

「……エッ？」

恋はシャルガに言われたことに驚いていた。

恋がすこし呆然としていたら

「あら、俺警戒されてる？それもそうだよな。いきなり赤の他人に一緒に来るか？って聞かれたら疑うよなぁ～。でも今のは本心だぜ。」

シャルガは自嘲気味に言った。

「まっ、呂布ちゃんは現にここがどこだかわからない所にいて、呂布ちゃんの知り合いなんて居ないし、足を挫いてるし、今まさに困ってる。いわゆる八方塞がりってやつだ。そうだろ？」

「……（コクッ）」

恋はシャルガの話を聞いて頷いた。

「だから、一緒に来るか？って聞いているんだ。」

恋はシャルガの目を見た。

嘘をついていない澄んでいる目だった。
次にセキトを見た。
この人なら信用できる、と言っているようだ。
恋は決めた。
「……一緒に、行く」
恋が答えるとシャルガは笑いながら' そうか' と言った。
「じゃあ決まりだな。これからよろしくな。」
「……（コクッ）」
恋は笑顔で頷いた。

二人の紡ぐ物語は

今、

始まろうとしていた

「ウ――ッ、ワンッワンッ！」

セキトも忘れてはいけない。

恋、シャルガと会合（後書き）

遅くなった理由

一つ
学校の行事、体育祭があったこと

二つ
地元の祭りに参加したこと

です。

かなり大変でした。
体育祭の場合は、四十人四十一脚の練習で両足の付け根を赤痣で痛めてしまったことです。
かなりの激痛で歩くのも一苦労でした。

祭りの場合
地元での自分の役割は鐘という楽器を鳴らすことで、地味ーーに腕が痛くなるんです。

地獄でした。

それはさておき、
また更新は遅くなるかもしれませんが、恋とエクシリアをよろしくお願いします！

次回恋がイル・ファンに
そして。やっとあのキャラが登場！お楽しみに！

オリキャラ紹介ａｎｄアンケート（前書き）

オリキャラ紹介です

オリキャラ紹介ａｎｄアンケート

シャルガ・エルビィン

男　二十歳

性格　楽天家

武器
蒼焔刀（そうえんとう）

シャルガの使う刀。刀身が蒼いのが特徴

シンフォニーブレード

シャルガの使う大剣。
微精霊達の力を使って自由自在に操ることかできる。
刀身の先から下まで一つの線が走り、そこにマナを入れるとシンフォニーブレードが二つに分かれ、シンフォニー・ダブルブレードとなる。

シンフォニー・ダブルブレード

シンフォニーブレードが二つに分かれ二振りの大剣になったシャルガの二大剣。この時は、二刀流で戦う。

世界を旅している自由奔放な青年。楽天家で細かいことは気にしない。
だが、いざとなるとローエン並みの頭脳を発揮する。
いつもはフラフラとしているが戦闘になると雰囲気が一変、武人の雰囲気をかもし出す。
思考がアルビィンに似ているため時々彼とセリフが重なることも。

好きな食べ物　カレー
嫌いな食べ物　茸料理
大事な物　絆　仲間　友

お知らせ

私の通っている学校で中間試験があるため次の更新が来週の金曜日以降になります。
ですのでアンケートを実施します。
アンケート内容は
このお話に他の恋姫キャラを出してほしいか否かです。
恋姫キャラを出さなくていいという人は、バツを
出してほしいという人は、候補のうちから選んでください

?:陳宮

?張遼

期間は１０月２０日昼１２時まで！

沢山のアンケートお待ちしています。

恋、イル・ファンへ（前書き）

みなさん！大変長らくお待たせいたしました。

恋とエクシリア　最新話

始まります！

漸く二人がイル・ファン入り

……長かった

恋、イル・ファンへ

「……シャルガ、…まだ？」

「後少しさ。」

一緒に行動をする事になった二人は今。

シャルガの大剣に恋が乗っていた。

なぜこうなったのか。

それは少し前に逆戻る。

「…ところで、シャルガ……これから、どうするの？」

恋は自分の方天画戟を持ってきたシャルガに聞いた。

「この後？この後はこの先にある！イル・ファン！ていう所に行くんだ。」

「いる・はん？」

「いや、いる・はんじゃなくてイル・ファン」

「……ハン」

「ハンじゃなくてファン！」

「…ハン」

「だからハンじゃなくてファン！発音はふとあを一緒にいう感じでファン！」

「……ファン？」

「そうそうファン、イル・ファンだよ。」

「……イル・ファン？」

「そうそう！やっと言えたね…」

「……言いにくい」

「（言いにくいか？これ？）」

「わふぅ……」

――閑話休題――

「で、イル・ファンに行くけど呂布ちゃんはそれでいいだろ？」

「……（コクッ）…シャルガに任せる。」

恋は頷いた。

「ＯＫ、決まりだな。」

恋はシャルガから受け取った自分の方天画戟を背中の背甲にしまい、立ち上がろうとした。

「…ってちょい待て。…足、大丈夫か？」

シャルガは恋の足を心配した。応急処置をしたからとはいえ、まだ完全に治ったわけではない。

「大丈夫。恋は歩け…ッ！」

恋は急にきた右足の痛みに思わず跪いてしまった。

「言わんこっちゃねぇ。呂布ちゃん、ちょっと座って。」

シャルガは恋を座らせると立ち上がり、背中の大剣の留め具をはずし、鞘ごと大剣を取り出し地面に置いた。

するとシャルガは両手を地面に置いた大剣に向け、目を閉じた。

「微…霊た……。我が……リ…の名の…とに、ちか…を剣に宿れ！

ファンネル・ソード

」

ブゥゥゥッン！

地面に置いた大剣が虫の羽音を出しながら光り、浮かんだ。

「……！！！！！！！？！？！？！？！！！！！！」

「……クゥ～ン」

（↑気絶した）

「さてと、今日も順調、順調！……動かせるかどうか、試してみるか」

シャルガは右手を浮かした大剣に掲げ、右手を右に動かした。

「！！！！！！」

大剣も同じ様に右に動いた。

次は左に動かした。大剣も続くように動いた。

その後もシャルガは大剣を動かしていた。
手を上下に動かしたら、大剣も上下に動き、右手を降ろし（このとき大剣は動かなかった）、体を前後左右に移動した。
大剣もシャルガから離れずに、前後左右に動いた。
恋は終始、驚きの連続だった。
セキトは気絶したままだが。

「こんなもん、かな。」
シャルガは大剣に左手を掲げた。宙に浮いた大剣が止まった。
「さて呂布ちゃん。この大剣に……って、セキト気絶してるし。」
「……シャルガ、……なんで動いたの？…それ」
恋はシャルガに恐る恐る聞いてみた。
「あぁそれはな、目には見えない微精霊達の力を借りて動かしているんだ。まぁ、微精霊達の力を借りているとはいえ、結構（ゲート）霊力野を使うから、使った後は頭がクラクラして気持ち悪くなるけどな。」
「……微精霊って、なに？」

恋は首を傾げながら聞いた。

「ああ微精霊っていうのは普通の精霊よりもっと小さい存在さ。」

「精……霊……？」

「あら、精霊も知らないか。精霊っていうのは人間の脳の器官の一つ、霊力（ゲート）野から発するマナを受け取って生きている存在で、人間が精霊術を使うと精霊がマナを受け取り魔術を発動してくれるんだ。わかった？」

「……多分」

「多分って……まあいい。詳しいことは後で教えるからさ。……さてと、呂布ちゃん、ちと失礼。」

シャルガは恋の右に移動し肩を貸して歩いた

シャルガは恋をあらかじめ浮かせていた大剣に座らせた。

シャルガは未だに気絶しているセキトを両手に抱いて恋に渡した。

セキトは恋の膝の上に乗せた。

「さて呂布ちゃん。大剣、動かすぜ。」

シャルガが大剣に手を翳した。

大剣が少し浮いた。

「！浮いた。」

シャルガは翳した手を下ろし、大剣を自分の脇に移動させた。

「どう？安定してるかい？」

「……（コクッ）」

「よし！そんじゃあイル・ファンに向かうとしますか。」

「……（コクッ）」

「ワンッ！」

「セキト起きたし…」

シャルガはイル・ファンに着く間、恋にこの世界の事、恋の麻袋の中に入っていた物、リリアブオーブの事などいろんな事を教えてあげた。

恋も自分の前いた世界の事を話した。セキトの事、家族達の事、仲間の事とかを。恋が話している顔はとても楽しそうで、寂しい感じだった。

シャルガはそんな恋を見てつい頭を撫でてしまった。シャルガはすぐに止めようとしたが恋にやめないで、と言われ撫でながら歩いていった。

そして冒頭に戻る

「んっ、そろそろアレが見つかる筈なんだけどなぁ。」

「……アレって？」

恋は首を傾げながら聞いた。

「ん？あぁアレっていうのは……！百聞は一見にしかず。あれを見な。」

シャルガは向こうを指差した。
恋はその指されたところを見ると

「！……樹が、光ってる。」

樹が光っていた。
樹は、枝と葉が黄色く光っていた。
恋がその樹に見とれていると、シャルガが喋ってきた

「あれは街灯樹。ここイル・ファンにある樹でな、樹が光ってるのは精霊術を使っているんだ。あれがあるということは、イル・ファンまで後少しだ。」

「…本当？」

「あぁ本当だ。街灯樹があるのはイル・ファンとその周辺にしかないからな。」

「……」
恋はその街灯樹を見続けていた。

「呂布ちゃん、呂布ちゃん着いたぜ。」

「えっ。」

恋はシャルガに声を掛けられ、気づいた。
向こうに光る建物が見えた。

「あれがイル・ファン。夜光の王都、イル・ファンだ。」

シャルガと恋はイル・ファンに入った。大剣はシャルガの背中に背負われて、恋はシャルガの肩を借りて歩いていた。
セキトは恋の左側を歩いている
なぜ乗せたまま入らないのか。シャルガ曰わく、絶対に問題になるだろ。だそうだ。

「呂布ちゃん、足痛くないか？……もう少しで病院に着くからな。」

「……（コクッ）」

大きな花がある広場を通り、橋を渡ってイル・ファンの病院、タリム学院外来へ向かった。

～タリム外来受付～

「やっと着いたぜ。呂布ちゃん、そこの椅子に座ろうぜ。」

「…（コクッ）」

二人は直ぐに近くにあった椅子に座った

「じゃあ、そこの受付に行ってくるから待っててくれ。」

「……（コクッ）わかった」

そしてシャルガは受付に向かった。

一人残された恋はセキトを膝の上に乗せて背中を撫でていた。

side out

side ???

「それではお大事に……ふぅ、今ので最後かな。」

研修衣を着た黒髪の少年がいた。

「お疲れさまです。」

側にいた女性が労いの言葉を掛けた。

すると

トントン

「失礼します。…ジュードさんいますか?」

この外来に勤めている男性が扉をノックして入ってきた。

「あ、ハイ何でしょうか。」

ジュードと呼ばれた少年が入ってきた男性に答えた。

「ジュードさん。申し訳ありませんが…患者をもう一人見てくれませんか?」

「えっ、……患者の容態は。」

ジュードは少し考えたあと男性に訪ねた。

「あ、はい。えーっと……患者は近くの街道に出現した魔物に襲われ右足首に捻挫をしたようです。一応応急手当てはしたようですがまだ患部が痛いと。」

男性は手元のファイルを見て答えた。

「そうですか。……わかりました、すぐに診ます。」

「わかりました。」

男性はジュードの答えを聞くとすぐに部屋を出ていった

少しばかりして男女二人組が入ってきた。彼女は男性の肩を借りて歩いていた。男性の右手にはゲージを持っていた。多分ペットだろう。

彼女は男性に椅子に座った。

「はじめまして、先生の代理をしています、ジュードと言います。二人のお名前を教えてください。」

ジュードが言うと二人が

「……呂布、奉先」

「俺はシャルガ。シャルガ・エルヴィン」

と答えた。

恋、イル・ファンへ（後書き）

やっと二人がイル・ファン入り果たしました。

長かった……

色々案が浮かぶときもあれば、全然浮かばなかったり……。大変でした。

（余談ですが。本日私の誕生日です。関係ありませんね？）

さて、皆様お待ちかねのアンケート結果発表！

アンケート内容はこの小説に他の恋姫キャラを出すか否か。そして出す場合は二人のうちどちらか。

では結果です。

まず、出すか否か

三対二で出すことに決まりました！

そしてどの恋姫キャラか

陳宮　三　　張遼　零

で陳宮に決まりました！

陳宮がどこにでるかは未だに決めていませんが一応、カラハ・シャールか、ル・ロンドのどちらかです。

それでは、次回をお楽しみに。

次回、恋の技が炸裂！

お知らせとお詫び（前書き）

報告です

お知らせとお詫び

皆さんにお知らせを致します。

恋とエクシリア、とおまもりひまり～炎と札を操りし者～、なんですが。
なかなか納得のいく作品ができないこと。風邪をひいたこと。スランプ状態に陥ってしまったこと。学校で同級生に「要するにお前はキモい」と言われたこと。

それらにより書けなくなってしまいました。

ですので上記の作品は暫く更新停止する事になりました。

更新を楽しみにしていた皆さんにはご迷惑をお掛けします。
申し訳ありません

その代わり、新しく書く作品のアンケートをとりたいと思います。

新しく書く作品は
真・恋姫†無双ですが候補が三つあります。
?.テイルズオブシリーズと真・恋姫†無双とのクロスオーバー
主人公はオリキャラ　　多数のオリキャラが出ます。

?:陥陣営高順が主人公。
?:愛紗の兄が主人公の物語　ヒロインは愛紗
?:天然楽天家の土使い少女がおりなすコメディ&シリアス物語
ヒーローなし
?:ディムロスがまた剣に転生して恋姫の世界を生き抜く物語
ヒロインなし
です。
期限は一週間後の１９日

沢山のアンケートお待ちしております。

重ね重ねお詫びを申し上げます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7027w/

恋とエクシリア

2011年11月17日18時36分発行